OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	［報告］石濵文庫所蔵　石濵純太郎自筆稿本類の発見：明治末年の「支那文学科」の学修、大正初年の「文会」の資料として
Author(s)	堤, 一昭
Citation	待兼山論叢. 文化動態論篇. 2018, 52, p. 21-39
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/76089
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

［報告］石濵文庫所蔵　石濵純太郎自筆稿本類の発見

――明治末年の「支那文学科」の学修、大正初年の「文会」の資料として――

堤　一昭

キーワード：石濵文庫／石濵純太郎／支那文学／漢詩文／文会

はじめに

石濵純太郎（1888（明治21）年～1968（昭和43）年）は、大正から昭和30年代に活動した第二世代の東洋学者である。敦煌学、ニコライ・ネフスキーと共に取り組んだ西夏文字の研究、富永仲基ら近世以来の大阪の学術研究などで知られる。彼は大阪の製薬業の家に生まれ、数え十歳から漢学塾の泊園書院に学び、大阪府立市岡中学校卒業後、高校卒業資格試験に合格し、1908（明治41）年に東京帝大の支那文学科に入学、1911（明治44）年に卒業した。帰阪後の1922（大正11）年から、新設の大阪外国語学校で選科生としてモンゴル語を学んだ。旧制大阪高校などで講師を務め、第二次大戦後からは関西大学文学部教授となった。没後、蔵書ほかの研究資料は、大阪外国語学校に学んだ縁により、大阪外国語大学に「石濵文庫」として入った。1979（昭和54）年には図書・雑誌・抜刷についての目録が刊行されたが、それ以外の資料はいまだ整理・研究途上にある。現在、「石濵文庫」は大阪大学総合図書館の貴重コレクション室に移され、保管されている。

さて今年2018年は、彼の没後50年に当たる。それを記念して10月に関西大学で国際シンポジウムが開催されることになった。阪大図書館の研究開発室員として石濵文庫の保存・公開・データベース化などを任とする筆者は、シンポジウムの講演者の一人となったことを契機に、8月25日から石濵文庫の未整理資料の調査を行った。その結果、石濵の卒業論文を含む東京帝大時

代の自筆稿本類などが発見された（ほぼ全文が漢文で記される。引用文の一部、講義の聞き書き部分のみ日本文）。それらは、石濵の学問の軌跡をたどる新たな資料となるばかりでなく、明治末年の「支那文学科」での学修、および大正初年の文会（漢作文の同好会・結社）の活動を知るための重要な資料となりうる。ここにその概要を報告する。1. 論文・文集（年代順）、2. 講義聞き書きメモなど、3.「景社紀事」（文会の記録）に大別し、外題（表紙にしるされた文字を「　」内に記す）、体裁、年代、内容説明の順で紹介する。各資料のタイトルは主に外題にもとづき筆者が付したもの。図版は巻末にまとめて掲載する。

1．論文・文集

①　長恨歌攷究

（外題）「長恨歌攷究　支那文學科　石濵純太郎」【図01『長恨歌攷究』表紙】
（体裁） 縦25.5cm×横16cm。紙縒綴じ1冊。表紙含め38葉。墨書。「甲子屋」の罫紙（表紙含め）使用。凡例2葉、目次1葉、本文の柱に1～33の葉数記載。
（年代） 明治43（1910）年6月11日（凡例末に記載あり）
（内容説明） 唐の白居易「長恨歌」を分析検討した論文。凡例の第一項と末尾の年代から、第二学年末の「學年試驗論文」であることが分かる。

表紙見返し【図02】に、第二学年（1909（明治42）年～1910（明治43）年）の受講科目が以下のように記され、当時の東京帝大「支那文学科」学生の一年間の学修の状況が分かる（『　』及び［　］内の人名は筆者による補記。[1] 以下同じ）。

星野　　［恒］教授　『左傳』必修　『論語』『周易』參考
岡田　［正之］助教授　文史解題　必修
森　［泰二郎］講師　先秦詩學　必修
日下　　［寛］講師　作文　必修
黒木　［安雄］講師　演習　必修

服部［宇之吉］教授　　目録學　参考

構成は以下の通り。序論第一、總論第二、文籍第三、本文解釋第四、本文校勘第五、本事第六、結構第七、比較第八、批評第九、文學第十（一 總論、二 梧桐雨、三 長生殿、四 雜記、五 我國謠曲）文学作品の分析でのこのような項目区分が何に基づくのか、調査の必要がある。

本文末尾（33葉表）には、朱墨で岡田正之助教授による次の評語が記されている（署名はないが、②欧陽修攻究の末尾の評語の筆跡から判明。筆者訳）。

> 試験の文は、漢文によって綴り得ており、他の学生より抜きんでていると言える。だが惜しむらくはまだ習熟せず、もとより主旨が省かれ明確さを欠く。志を遂げ、勉励せよ。[2)]

②　歐陽修攻究

（外題）「支那文學科　明治四十一年入學　石濵純太郎　論文題目　歐陽修攻究」【図03『歐陽修攻究』表紙】

（体裁）縦25cm×横16.5cm。糸綴じ1冊。墨書。表紙を除き139葉。本文は「せのや」の罫紙使用。葉数記載なし。表紙見返しに論文審査委員の論文授受の表を印刷した紙1枚が貼り付けられている。本文各所に朱筆による訂正あり。藍墨、淡墨による評語・訂正が欄内外に多数あり。末尾にも藍墨、淡墨の順で総評が書き込まれている。

（年代）1911（明治44）年3月（跋文に「明治辛亥季春」の記載あり）

（内容説明）北宋の文人政治家・歐陽修の生涯と著作を分析検討した論文。序の末尾に「卒業論文」とあり、表紙見返しの表に論文審査委員による本論文授受の月日（星野［恒］教授：五月八日～九日、岡田［正之］助教授：五月九日～五月廿日、黒木［安雄］講師：五月廿日～五月廿四日）が書き込まれ、末尾に岡田正之、黒木安雄の総評（それぞれ藍墨、淡墨）が各自の自筆で記されていることから、石濵の卒業論文の原本であることが判明する。[3)]

構成は以下の通りである（括弧内は葉数と表裏。もとは葉数が記されてい

ないため、筆者が表紙を除く本紙の一枚目から数えたもの)。

序（1表裏)、緒言（2表裏)、歐陽修攻究目次（3表～4裏)、(歐陽修の肖像：5表)、「歐陽修攻究」(扉：6表)、序論第一（7表～9裏)、總論第二（10表～13表)、時代第三（14表～24裏。さらに序説14表～、五代15裏～、宋初18裏～、宋初文學21表～に細分されている)、傳記第四（25表～31裏。附一 系圖32表～34裏、附二 年譜35表～48表)、資性第五（49表～56表)、政治第六 闕、藝文第七（57表～74裏。附 著作年表75表～76裏)、學術第八77表～90裏（序説77表～、經學77裏～、史學85表～に細分)、文學第九（91表～120裏。序説91表～、文92表～、詩102裏～、辭賦與駢儷108裏～、詩餘112表～、總説117表～に細分)、結論第十（121表～122表)、歐陽修攻究附録（123表～。さらに一 文籍考124表～127裏、二 引用書目128表～131表、三 引用原文集132表～133裏に細分)、歐陽修攻究補遺（134表～136裏)、「石濵純太郎識」(137表～137裏)、書後（138表～138裏)、(岡田助教授の評語：139表～139裏)、(黒木講師の評語：139裏)

従来、石濵の卒業論文の題目は「歐陽**脩研**究」とされ、岡田正之教授の指導を受けたとされてきた[4)]が、この原本により題目が「歐陽**修攻**究」であり、審査委員が星野恒教授、岡田正之助教授、黒木安雄講師の三人であったことが判明する。もっとも星野はすぐに岡田に送り、岡田、黒木の二人のみが評語を書き入れている。後にふれる「緒言」および末尾の総評の内容からも、岡田が主な指導教員であったと考えられる。

「序」【図04】からは、これまで知られなかった大学入学前後の石濵の状況を知ることができる。石濵は市岡中学卒業の1906（明治39）年に一高を受験して失敗したことは知られていた。ここでは、上京してから「高等學校工科」を受験して不合格となったと記す。父（石濵豊藏）から、実学が無理でも文学を修めてよいのではないかと言われ、発憤して勉強し、翌年（1908（明治41）年）秋に大学に入学したという。1909（明治42）年の春から夏にかけて父の病は悪化し、1910（明治43）年春、最後に見舞った際には、翌

年の夏の卒業を心待ちにしていたが、数日後に死去したと記す。

「緒言」には、この題目を選んだ状況や設定についての説明が箇条書きで記される。当時の学生指導や「文学科」の学生の論文に対する意識などが伺える（筆者訳。［　］は筆者による補足）。

一　当初、自分で題目を選択しようとしたが決まらず、岡田助教授を訪ねて題目を請うた。先生はまず「歐陽修はどうだろう」と言った。言い終わる前に、私は「そうします」と言い、二度と敢えて他の題目を請わなかった。いくつも候補があって決まらないのをたぶん怖れたのだ。だが“杯の水には大舟を浮かべるだけの力はなく、芥が浮かんで舟になりうる［のがせいぜいだ］[5)]”と知らなかったのである。後で後悔したが、間に合わなかった。

一　本論文では、政治の条は欠いた。文学科の学生は政治を論じるべきでないだろう。

一　本論文では、学術の条はたいへん簡略である。文学科の学生は哲学科・史学科の学生とは職分が異なるだろう。

一　本論文にあるべきなのに作成する時間がなかったものは次のごとし。地図1枚、時代附録年表（第一は時代年表、第二は文学年表）

一　歐陽修の後代への影響は、とうてい自分の学力で［論じ］いたるところではない。

一　各章末には参・考の二項目を附した。参は参照の意味、考は考拠の意味である。

一　本論文での論拠はおおむね歐陽修の自著に基づいた。これは研究が広くないためで、誤りがなければ幸いである。粗略であるのは、恥じ入るばかりである。

論文完成の日。石濵純太郎しるす。

本文冒頭の「序論第一」で注目すべきは、文学評論の方法を夏目漱石の文学論からそのまま借りていることである。「夏目漱石金之助の論を竊借して、以て私見に代えて序論に充つ。」（7表終わりから2行目。【図05】）、また参照

注に「夏目氏の論は皆な氏の著「文學評論」第一編序言に出ず。」（9表）[6]。夏目漱石は石濵の入学の前年1907（明治40）年7月まで、東京帝大の英吉利（イギリス）文学科で講師として文学論を講じていた。[7] また、石濵は支那文学科に入学する直前、坪内逍遙に就いて英文学を学ぶことを願い、早稲田大学を受験しようとして果たさなかったという。[8] 夏目漱石とその著作、英文学は、同時代の石濵の関心の範囲内にあったのである。[9]

「總論第二」以下の本文の検討は今後に譲り、末尾に記された岡田助教授、黒木講師による石濵の卒業論文への総評を見たい。岡田は次のように記す（筆者訳）。

> この篇の論ずるところは別に優れた創見はないが、重要な点を外しているわけでもない。總論第二および時代第三で、宋初の気風や教学を叙述しているところは大変見栄えがする。伝記第四で資性を論じているところは最も良い。おそらく全篇中の白眉である。藝文第七の考証もまたとても詳しい。学術第八の経学論は永叔（歐陽修）を宋儒の先駆とし、また考証学派の元祖とする。まことに不動の説である。文学第九の詩を論ずるところだけは、浅くおろそかで見るところはない。再考すべきである。要するに篇の長所を求めれば、それは考証にある。一つ一つ附注に挙げた書名から意図を知りうる。けれどもそれが雑駁で精粗を選ばぬ傾向にあるので物足りない。文章は往々に文字が転倒する間違いがあるものの、深くとがめるほどではない。この種の論文は漢文に習熟していなければ著すことができない。わが大学の支那文学科創設以来の卒業者は十人余りだが、漢文で著述した者はいなかった。今、この篇を見ると、「馬頭米嚢（ばとうべいのう）」の感（ようやく優れたものに出会えたことのたとえ[10]）を持たせるものがある。我々は、願わくば［あなたが］止めることなく勉めて大成することを待つ。明治辛亥（44年、1911年）五月中旬。岡田正之が批評した。[11]

続いて黒木は次のように記している（筆者訳）。

> この冊（論文）は、第五「資性を論ず」以下の篇はどれも良い。資性を

論じて、天の時に先立ち役立ったことを述べ、学術を論じて、歐陽修が宋儒の先駆者であって、清儒の創始となったと言うのはまことに卓見である。岡田君は眼識があり、すでに他より優れていることを見分け、評定は十分である。ここに数文字を記したが、つまらぬ続き（続貂）であると笑わぬよう。亥年の夏五月（立仲）黒木安雄が読んで注記した。[12)]

岡田は論文の長所短所を挙げて評し、黒木はその評価にほぼ従っている。總論第二、時代第三、伝記第四の評価が高く、また支那文学科で初めて漢文で卒業論文を著したことも評価されている。また論文各所に記された評語の多さからも、二人は彼の論文を丁寧に読みこんでいることが分かる。ただ岡田が冒頭で「別に優れた創見はない」と断じ、文学第九への酷評も含めれば、最高の評価とは言えないだろう。論文試験の合格者に行われる口述試験[13)]の場では、教授（岡田か）と口論となったという。[14)]石濵に卒業論文を元にした業績はない。彼が後年の内藤湖南との出会いから、「支那文学」以外の東洋学の研究に進む契機は、既にこの時点にあったのかも知れない。

③　論不如歸漢譯（『不如歸』の漢譯を論ず）

（外題）「論不如歸漢譯　支那文學科　石濵純太郎」【図06】
（体裁）縦25cm×横16.5cm。紙縒綴じ1冊。表紙含め「せのや」の罫紙に墨書。全15葉。葉数記載なし。本文各所に淡墨による評語・点が施され、末尾に岡田正之（藍墨）、黒木安雄（淡墨）による読了の識語あり。
（年代）1911（明治44）年五月下旬（末尾の石濵の識語より）
（内容説明）徳富蘆花の小説『不如歸』を杉原夷山が漢訳した『漢訳不如帰』を蘆花の原文と対照させて検討した論文。岡田正之、黒木安雄の評語があることから、大学に提出した試験論文と判明する。杉原の漢訳は「明治四十四年四月十五日発行」なので、石濵は刊行直後に入手、卒業論文執筆と平行ないし直後に急ぎ作成したものと考えられる。[15)]

末尾の岡田の識語は「辛亥六月初五　岡田正之讀」、黒木のものは「粤六月初七夕　黒木安雄　讀注」のみである。

④　石濱純太郎「文稿」

（外題）「文稿」

（体裁）縦25cm×横16.5cm。紙縒綴じ1冊。表紙を除き61葉。葉数記載なし。最初の1葉を除く本文は「せのや」の罫紙使用。墨書。朱墨による添削多数。

（年代）1908（明治41）年10月24日～1911（明治44）年6月8日

（内容説明）石濱純太郎の漢作文に日下寛が添削を加えたもの。東京帝大の支那文学科の講師の日下寛の担当科目「作文」（①長恨歌攻究の内容説明を参照）の課題作文である。石濱が入学した1908年から卒業の1911年まで、提出し添削された漢作文52点を卒業時にまとめ、同学の佐々木平次郎に序文「石濱君文集序」を寄せてもらって1冊に綴じたと考えられる。

罫紙の冒頭に課題名と氏名（石濱純太郎）が書かれる。作文はおおむね罫紙1枚で末尾に年月日と課題の種別が記されている。朱墨（墨書の場合もある）で作文に添削･圏点が施され､末尾に総評と「[日下]寛妄（妄評､妄批)」の句が記される。一週ごとの「教室課題」ばかりでなく、日下寛が開く文会の場と思しき「林亭」での課題も交じる。その場で書いた「即席」「席上」と、帰宅後に書いた「宿題」「宿」（次回提出か）が交じる。添削は授業や文会の場で行われたのであろう。石濱は大学の授業のみならず、文会に出席して日下から漢作文の指導を受けていたことが分かる。

課題名とそれぞれの末尾に記された年月日、課題の種別を以下に示す。通し番号01～52は筆者が仮に附したもの。複数枚にわたるものは枚数、塗り消し（■)、見せけち（〓）等を附記する。

石濱君文集序（明治辛亥　同學　佐々木平治郎）

01. 送米國艦隊序（戊申十月念四　林亭文會課題）【図07】

02. 愛菊説（明治四十一年十一月念八日　林亭課題）

03. 書渡邉崋山手簡後（戊申十一月念八　林亭課題）

04. 與孔子教會員書（明治戊申十二月仲一日　夜書　宿題）3枚

05. 送學友歸省叙（戊申十二月旬二日　文會課題）

06. 書統計年鑑後（明治戊申朧月旬二　文會課題）
07. 楠木正成論　宿題（明治四十二年六月四日書）2枚
08. 記事一則 南龍公逸話（明治四十二年十月二十三日文會席上譯文）
09. 題伊藤公畫像（明治四十二年十二月初四席上課題）
10. 記森蘭丸事（明治庚戌二月十二日席上課題譯文）
11. 書維新志士遺芳帖後（明治四十三年二月十二日文會席上課題）
12. 論朝鮮吏民文（明治四十三年九月廿二日教室席上課題）
13. 書水害彙報後（明治四十三年九月二十二日教室席上課題）
14. 讀韓子原道（明治四十三年九月廿九日書　宿題）
15. 與友人論學書（明治四十三年九月廿九日教室席上課題）
16. 題楠公訣別圖（明治四十三年十月五日書）
17. 君子以文會友説（明治四十三年十月六日席上課題）
18. 題飛行器圖（明治四十三年十月六日席上課題）
19. 題蒙古來襲圖（明治四十三年十月十三日教室課題即席）
20. 源頼朝論（明治四十三年十月十九日書宿題）
21. 忠孝難兩全説（明治四十三年十月二十日教室~~席上~~課題即席）2枚
22. 題河内艦之進水式圖（明治四十三年十月二十七日書宿題）
23. 記事一則譯文（明治四十三年十月念九日文會席上）
24. 養菊説（明治四十三年十一月十日教室課題即席）
25. 題加藤肥州讀論語圖（明治四十三年十一月仲七日書宿）
26. 書觀楓詩卷後（明治四十三年十一月仲七日教室課題~~席上~~即席）
27. 尚志説
28. 題謙信咏月圖（明治四十三年十一月念四日■教室課題即席）
29. 信玄富治國之才譯碎玉話（明治四十三年十一月念六日文會課題席上）
30. 讀白石餘稿（明治四十三年十一月念六日文會席上）
31. 書朱子小學後（明治四十三円十一月三十日夜書宿）
32. 祭絅齋先生文（明治四十三年十二月初七書宿）
33. 記歳寒三友（明治四十三年十二月初七書宿）

34. 題松竹梅同瓶之圖（明治四十三年十二月初七書宿）
35. 送友人歸省叙（明治四十三年十二月仲五教室課題即席）
36. 君子不器説（明治四十四年正月念六書宿）
37. 題撒豆圖（明治四十四年正月念六書宿）
38. 讀漢學（明治四十四年正月念六教室課題即席）
39. 獻歳菊賛用福壽韻（明治四十四年貳月初二書宿）
40. 美術學校燼餘記（明治四十四年二月初二書宿）
41. 題菅相公畫像（明治四十四年二月初二教室課題即席）
42. 有治人無治法論（明治四十四年貳月九日書宿）
43. 慈故能勇説（明治四十四年二月仲五書宿）
44. 題東台遠望圖（明治四十四年二月仲五書宿）
45. 書正氣歌後（明治四十四年二月廿一日夜書宿）
46. 南北朝正閏論（明治四十四年三月初二書宿）2枚
47. 文論（明治四十四年三月九日書宿）
48. 譯文記事一則（明治四十四年五月四日教室課題席上~~卅席~~起草）
49. 改支那文學科學制私議（明治四十四年六月一日書）３枚
50. 記事一則（明治四十四年六月一日書宿題）
51. 書試業文後（明治四十四年六月八日教室課題即席）末尾に「辛亥七月大學畢業式日　勺水日下寛識」とあり。
52. 策問一道（明治四十四年六月八日書宿）2枚

課題は時事および日本史に関わるものが目立つ。その中で「46. 南北朝正閏論（明治四十四年三月初二書宿）」は目を惹く。この年の2月、彼の義兄（姉かつの夫）で衆議院議員の藤澤元造（元、黄鵠）が南北朝正閏問題を帝国議会で質問しようとし、果たさず辞職した直後にあたるためである。[16)]

２．講義の聞き書きなど

①　森泰二郎「毛詩講義」聞き書きメモ

（外題）「召南　森泰之郎先生　毛詩講義」【図08】（「之」は「二」の書き誤り）
（体裁）縦12.5cm×横17cm。全34葉。糸綴じ1冊。和紙に墨書。
（年代）1908（明治41）年～1909（明治42）年6月9日
（内容説明）第1葉の冒頭【図09】に「毛詩國風　森泰二郎先生講義（半途ヨリ）」、裏表紙見返しに「明治四十一年　明治四十二年　東京帝國大學文科大學　森講師講義　先秦詩學（毛詩學）　石濵純太郎筆記」とある。石濵純太郎が森泰二郎講師による支那文学科の必修科目「先秦詩學」の内容を大学1年の途中から2年学年末までメモしたもの。板書と思しき毛詩の原文の他、講義内容が漢字カタカナ交じりで詳細に筆記されており、実際の講義内容を知りうる貴重な資料である。

②　星野恒の『左傳』『論語』講義　聞き書きメモ

（外題）なし。
（体裁）和紙５枚を折りたたみ、表裏に墨書または鉛筆書き。朱墨で「帝大星野教授の講義聞書　純太郎」等の書き込みあり。【図10】
（年代）1908（明治41）年～1909（明治42）年の間［石濵の在学中のいずれか］
（内容説明）星野恒教授担当の『左傳』（必修科目）、『論語』（参考科目）の講義内容を筆記したもの。森の講義聞き書きメモと異なり、分量も少ない。

③　李卓吾文集　巻十八

（外題）「詩　十八」
（体裁）縦24.5cm×横16.5cm　表紙除き25葉（柱に葉数注記）。墨書。朱墨による校勘あり。
（年代）1909（明治42）年6月26日
（内容説明）裏表紙見返しに「李氏文集第十八卷寫了原本東京帝國大學附屬

圖書館藏本（刊本）也　明治四十二年六月二十六日　石濵純太郎識」、朱墨で「與李氏焚書（東京帝國大學附屬圖書館藏〔刊〕｛卷之六｝）校之　兩書誤多而前書甚矣」と記され、明・李卓吾の文集・卷十八（四言長篇「讀書樂」ほか）を筆写し、同『焚書』卷六で校勘したものと知れる。なぜ李卓吾の文に注目したかなどは未詳。

３．景社紀事

（外題）「景社紀事」【図11】

（体裁）縦25cm×横17.5cm　紙縒綴じ1冊。表紙除き39葉だが書き込みがあるのは29葉。葉数表記無し。「景社文稿」原稿用紙に墨書（一部朱墨）。挟み物3紙。

（年代）1911（明治44）年2月～1917（大正6）年9月

（内容説明）大阪の文会「景社（けいしゃ）」の規約、同人名、例会の記録の原本である。本稿で紹介する資料のうち、この「景社紀事」のみ、石濵を含む複数の人物の執筆による。

冒頭の「景社同約」【図12】（1表～2表。葉数は筆者が本紙の一枚目から数えたもの）の末尾には、「明治四十四年辛亥二月社末西村時彦識」の識語がある。続けて朱墨の同筆で小牧櫻泉の社約についての発言が引用され、さらに附記の最後に「大正乙卯一月［西村］時彦又識」とある。これから、1911（明治44）年2月に西村時彦（天囚）を会主として景社が発足し、1915（大正4）年も彼がその任にあったことが分かる。

次には同人名を列挙した「景社題名」（3表～5裏）が来る。氏名、字号、出身地（旧国名。大阪は「浪華」）、年齢、住所が記される。氏名と号のみ、以下に列挙する（□は判読不能または確実でないもの）。籾山逸（衣洲）、西村時彦（天囚）、木﨑愛吉（好尚）、牧巻（放浪）、岡山泉（雲介）、田中直（柳江）、光吉元（迂菴）、馬場譲（東海）、永田暉明（碧桐）、藤澤元（黄鵠）、武内義雄、林（植田）政、長尾甲（雨山）、波多野寧（光田）、内藤虎（湖南）、

狩野直喜（君山）、富岡謙藏（桃華）、磯野惟秋（秋渚）、石濵純太郎、本田成之（颪軒）、岡崎文夫（櫻洲）、藤林廣超、神田喜一郎（鬯盦）、吉田鋭雄（松茵）、定恵苗（修梵）、藤澤章（黄坡）

続いて文会の例会記録「景社紀事」が記される（7表～28表）。おおよそ毎月の下旬（「念」は二十の意）に文章を持ちより集まったさまが読みとれる。例会の記録は毎回の幹事（各記録末尾に「幹事某某記」とある）がまわりもちで担当しており、この冊子自体も次の幹事に回されていったと考えられる。以下、例会の年月日と毎回の幹事のみ列挙する（01～26の番号は筆者による）。なお、最初の例会（1915（大正4）年1月）が、会の発足から4年も後である事情、また例会記録の最後の幹事が籾山逸（衣洲）であるのに石濵の手元に「景社紀事」が残った理由は未詳である。

01：乙丑（1915（大正4）年）一月念五（會主（西村）時彦記）、02：乙卯二月念三（幹事籾山逸記）、03：三月念五日（幹事岡山源六記）、04：乙卯四月念六日（幹事植田政藏記）、05：乙卯五月念六日（幹事武内義雄記）、06：六月念五（幹事藤澤元記）、07：七月念五（幹事光吉元記）、08：八月念五（幹事西村時彦）、09:十一月廿五日（幹事籾山逸誌）、10:丙辰（1916（大正5）年）一月念五（幹事長尾子生（雨山）。武内義雄）、11：二月念五（幹事藤澤元記）、12：三月念五（幹事西村時彦）、13：四月十二日（幹事西村時彦）、14：四月念五（幹事光吉元記）、15：五月念七（幹事籾山逸識）、16：六月念五（幹事西村時彦）、17:七月念五（（西村）時彦記）、18:十月念五（石濵純太郎記）、19：十一月十九日（幹事籾山逸記）、20：朧月念五（幹事植田政藏）、21：丁巳（1917（大正7）年）一月念五日（幹事藤澤元記）、22：三月念（武内義雄記）、23：四月念五（幹事武内義雄記）、24：五月三十日（石濵純太郎記）、25:六月念七（幹事西村時彦記）、26:九月念五（幹事籾山逸記）

見開き一葉分を空けた29葉裏には、狩野直喜、内藤虎次郎、富岡謙藏、石濵純太郎、内村邦藏、磯野於菟介、小牧昌業先生の名前と住所が記され、3枚の紙が挟まれていた。①「景社文稿」原稿用紙に記された例会記録の書きかけ、②巻紙に記された年次記録の草稿らしきもの（大正七年一月廿五

日から十月にかけての月日が記される)、③昧盦先生あて石濱純太郎書簡である。

これまで石濱が内藤湖南に出会ったのは、1916(大正5)年7月16日に開かれた大阪の「景社」と京都の文會「麗澤社」の第一回連合会とされてきた[17]が、「景社紀事」にはこの日の記録はない。1916年1月25日(10:丙辰一月念五)の記録には内藤の参加が記され、同年4月25日(14:四月念五)の例会には内藤、石濱とも参加している。両人の出会いは、より早かったのである。

おわりに

本稿は概要のみの速報であり、紹介した各資料のさらなる調査・研究が必要なことはいうまでもない。特に最後の「景社紀事」は、重建懐徳堂や泊園書院に関わる資料としても重要である。この記録の時期は、會主の西村時彦(天囚)が懐徳堂記念会、重建懐徳堂の設立に奔走していた時期にあたる。同人の藤澤元(元造、黄鵠)、藤澤章(章次郎、黄坡)は石濱の義兄弟でもあり、泊園書院の院主となった。まずは「景社紀事」の翻字と解読から着手する予定である。

[注]

1) 東京帝国大学 1932:415,423, 426, 429, 431, 433、東京帝国大学 1942:275
2) 筆者訳。原文は「試驗文能綴以漢文、可謂比他出一頭地。然惜語未習熟、素旨省欠明、暢志勉旃。」標点は筆者による。
3) 堤一昭 2012:17 の注 9 では、卒論は東大図書館に収蔵、同 2017:iで石濱文庫所蔵の「歐陽修攻究」を草稿と推定したが、原本の出現により、誤りと判明した。
4) 石濱先生古稀記念會 1958:「年譜略」3-4
5) 『莊子』逍遙遊篇の「且夫水之積也不厚、則負大舟無力。覆杯水於坳堂之上。則芥爲之舟、置杯焉則膠。水淺而舟大也。」に基づく。
6) 石濱文庫に 1907(明治 40)年、大倉書店刊『文學論』が所蔵される。彼が卒論執筆時に使った本であろう。大阪外国語大学附属図書館 1979:和書の部 190 参照。
7) 東京帝国大学 1932:431

8）　石濱先生古稀記念會 1958：「年譜略」3

9）　ちなみに、夏目漱石『三四郎』の主人公の小川三四郎は 1907（明治 40）年に東京帝大の文科大学に入学、『こころ』の主人公の「わたし」は 1909（明治 42）入学という設定である（高田知波 2015：50-51）。1908（明治 41）年入学の石濵は、これらの小説に描かれたような環境の中で大学生活を送ったことになる。

10）唐の雍陶「西歸出斜谷詩」の「馬頭初見米囊花」に基づく。さらに原詩の意味を超えて「ようやく優れたものに出会えた」との意を持たせたのは、菅茶山『黄葉夕陽村舎詩』の「廣島訪頼千秋分得螢字」への韜頭評に「閲到此詩、馬頭初見米囊花」とあることからしい。やす「『菅茶山』読書ノート：“初めて見る米囊花”」（https://6426.teacup.com/cogito/bbs/456）2018.9.4 閲覧を参照。

11）原文は次の通り（訓点は筆者による。以下同じ）。「此篇所論、雖別無奇創、又不甚失窾會。總論第二、及時代第三叙宋初之風氣教學者、頗可觀。傳記第四論資性者最佳、恐全篇中白眉。藝文第七考證亦頗精。學術第八経學論以永叔爲宋儒之先驅、又爲攷證學派之鼻祖、洵是不動之説。獨文學第九論詩者、膚淺踈略不足觀、須再考。要之求篇之長、在於攷證、如其一々附注引援之書名、足以知其用意、然引據雜駁、有不擇精粕之嫌、不能無憾也。至文章、則雖往々有文字顚倒之失、不足深責。此種之論文非熟漢文、不得著筆。我大學支那文學科刱置以来、卒業者十有餘人、無以漢文撰次論文者。今見斯篇使人有「馬頭米囊」之感。吾等幸勉而不息、他日之大成、可幾而待也。明治辛亥五月中浣、岡田正之評批。」

12）原文は以下の通り。「此册、第五論資性以下篇々皆佳。其論資性則謂資于先天、其論學術則謂爲宋儒前驅而開清儒先河者、眞個具隻眼矣。岡田君眼高已識其抜頭角、評隲具備。爰書數字、勿笑続貂。亥夏立仲。黒木安雄讀注。

13）東京帝国大学 1932：369-371「試驗規程」第四条、第九条；376「卒業試驗細則」第六条

14）藤枝晃 1969：30「東大の卒業論文の口頭試問で教授とケンカして、大阪へ帰った。「あれは恩師でなく怨師だ」と口で言うだけならまだしも、東京には容易なことでは行こうとしないのである。」

15）国立国会図書館デジタルコレクション『不如帰：漢訳』（http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/888226）2018.9.24 閲覧。石濵文庫所蔵の「漢譯不如歸　德富蘆花原著　杉原夷山譯　明治四十四年　東京寺本安之助　一册一五糎」（國書 910 日本文学）が、この論文執筆時に使用した本と考えられる。大阪外国語大学附属図書館 1979：漢籍の部 214 参照 。

16）石濵自身の当時の回想については、吾妻重二 2010：140 参照。

17）石濱先生古稀記念會 1958：「年譜略」5、石濵純太郎 1934：53「後に西村碩園

先生の御伴をして麗澤社景社の聯合文會の席上で初めて御目に掛つたので非常に嬉しくなり、時々御宅まで伺つていろいろ御話を承つた。」石濵の記憶違いか。ともあれ内藤との出会いは、彼をモンゴル学研究へ導くこととなった（堤一昭 2017 参照）。

［参考文献］

吾妻重二 2010：『泊園書院歴史資料集―泊園書院資料集成 1―』、関西大学東西学術研究所

石濵純太郎 1934：「僕の憂鬱」、『支那学』第 7 巻第 3 号（内藤湖南追悼録）、pp.52-54

石濱先生古稀記念會 1958：「石濵純太郎先生年譜略」、『石濱先生古稀記念東洋學論叢』、石濱先生古稀記念會、11p.

大阪外国語大学附属図書館 1979：『大阪外国語大学所蔵石濵文庫目録』、大阪外国語大学附属図書館

高田知波 2015：「『こころ』の「先生」は大学を卒業したか」、『駒澤国文』51 号、pp.47-71

堤一昭 2012：「石濵純太郎を紹介する新聞記事 2 件（1923 年、1927 年）および解説」、『石濵文庫の学際的研究―大阪の漢学から世界の東洋学へ―』平成 23 年度大阪大学文学研究科共同研究研究成果報告書、pp.16-21

堤一昭 2017：「石濵純太郎の“モンゴル学事始”」、『大阪大学石濵文庫所蔵『フフ・トグ／青旗』（1941 年）』、中国文化フォーラム、OUFC ブックレット（ISSN2187-6487 オンライン）第 10-1 巻、pp.i－iv

東京帝国大学 1932：『東京帝國大學五十年史 下册』、東京帝國大學

東京帝国大学 1942：『東京帝國大學學術大觀 總説 文學部』、東京帝國大學

藤枝晃 1969：「町人学者・石濵純太郎」、『図書』（岩波書店）234 号（1969 年 2 月号）、pp.30-33

（文学研究科教授）

図 01　『長恨歌攻究』表紙

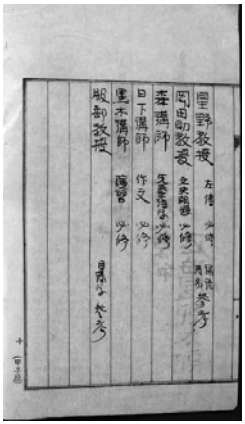

図 02　同 表紙見返し

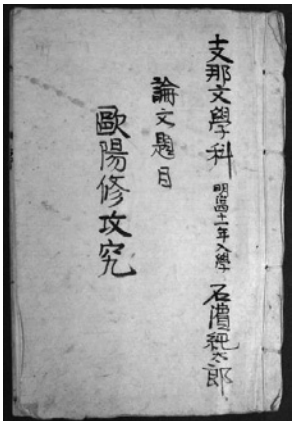

図 03　『歐陽修攻究』表紙

図 04　『歐陽修攻究』
序の前半

図 05　『歐陽修攻究』
序論第一の冒頭

図 06　『論不如歸之漢譯』
の表紙

図 07　『文稿』第 1 葉表

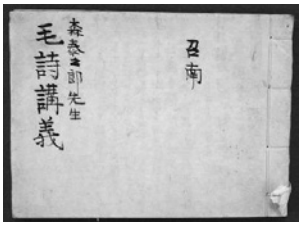

図 08　森泰二郎「毛詩講義」メモ　表紙

図 09　同 第 1 葉表

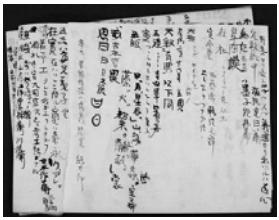

図 10　星野恒講義受講メモ

図 11　『景社紀事』表紙

図 12　『景社紀事』第 1 葉表

提要

〔報告〕石濱文庫所藏　石濱純太郎手稿的發現
——日本明治末期“支那文學科”學修、大正初年“文會”活動資料——

堤　一昭

石濱純太郎（1888～1968）是日本東洋學者、關西大學教授。他在敦煌學、西夏文字、近世大阪儒者活動等各個領域皆有所建樹。大阪大學圖書館“石濱文庫”收藏了超過四萬冊石濱純太郎的藏書和他的各種研究資料。2018年，在石濱逝世五十周年後，我在“石濱文庫”發現了石濱純太郎在東京帝國大學支那文學科就讀時的畢業論文等各種手稿。這些手稿幾乎都由漢語文言文寫成。通過研究這些手稿，我們可以了解有關20世紀初期日本的大學“支那文學科”的學修內容以及當時日本文人的“文會”活動情況。新發現的手稿資料如下：

1、 論文・文集：①長恨歌攻究 ②歐陽修攻究 ③論不如歸漢譯 ④石濱純太郎“文稿”
2、 講義課程筆記等：①森泰二郎《毛詩》講義的筆記 ②星野恒《左傳》《論語》講義的筆記 ③鈔本李卓吾文集卷十八
3、 景社紀事